

貴金属・宝石製装身具(ジュエリー)製品製造業

夢を売る宝飾デザイン企業

～技術を生かすデザインとデザインを生かす技術の出会い～

7-32 池田エンタープライズ株式会社

宝飾では稀有な業態～デザイナーズブランド

池田エンタープライズ株式会社は、ブランド創始者である池田啓子氏が描くデザインによる宝飾品を同社で制作し、同社で営業・販売している、国内宝飾関連では稀有なデザイナーズブランドである。代表取締役社長の深山氏によると、現在役員を含めて13名の社員がいるが、営業・販売担当5名、事務管理担当2名を除く3名が宝飾品制作現場で活躍する技術者である。3人揃って1級貴金属装身具製作技能士というもののづくり企業である。

アイデアがよくても技術がなければものはつukれない

宝飾品の価値は、宝石の美しさをベースに、それを活かすデザインと製作技術を両輪とする。宝飾の分野だけでなく、目を拡げて常に美しいものに接し、先人の残したものに学び、新鮮な感動とときめきを忘れず、デザインの意図を表現する技術力を磨く必要がある。池田啓子氏はこのことを「オリジナリティの底辺には必ず技術がある。」と表現する。技術とデザイン、技術者とデザイナーの相互信頼関係こそが、宝飾品の価値を大きく左右するという。池田エンタープライズは、技術を生かすデザインとデザインを生かす技術という関係を構築することでトップブランドとしての地位を確立、維持している。



ブランド創始者
池田啓子氏

人材育成期間を短縮してくれる技能検定制度

池田エンタープライズは、他の企業に勤めることなく、宝飾の専門学校で半年から1年勉強してきた人、あるいは宝飾製作の経験なく大学を卒業してきた人などを採用している。したがって、入社早々ではほとんど何もできないに等しい。そこで、給料を支払いながら勉強してもらう期間をいかに短縮できるか、が大きな経営課題となる。この課題を解決する1つの有効な方法として技能検定がある、と池田氏は言う。技能検定に合格するためには、限られた時間内に基本的な技術を駆使することが

要求される。段取り、時間管理というのも重要な技術である。これがうまくできるようになれば、技術者の大きな自信にもなる。「段取り九分」と言ってもよい。あとは本人の熱意とセンス、バランス感覚である。親方を中心とする徒弟制のような技術継承の慣習がない宝飾のアトリエであればこそ、このような客観的な検定制度が役に立つと池田氏は指摘する。



代表取締役社長
深山いさを氏

地金までも提供するが、あくまでも自己責任で

池田氏によると、池田エンタープライズでは、技能検定の各等級を次のように位置付けている。2級は「持っていて当然」のレベル、1級は「普段の実力が試される」レベル、といった具合である。このことから、同社では、技能検定への挑戦はあくまでも技術者自身の自覚の問題とされていることがうかがえる。池田氏も「決して強制はしない。」と明言する。しかし、挑戦する意欲を持った社員には、練習のためのアトリエの使用を許し、練習用の地金までもを提供するという。池田氏（デザイナー）及びそのデザインと対等に理解しあえるだけの実力と自立心を持った技術者を養成したいという強い意思が伝わってくる。



デザインをかたちに変えるアトリエ

池田エンタープライズ株式会社

- 業種: 貴金属・宝石製装身具(ジュエリー)製品製造業(宝飾製造・販売)
- 設立: 昭和51年
- 従業員: 13名
- 技能士: 3名
- 住所: 東京都港区
- 代表者: 深山いさを

技能士へのインタビュー

吉村 元晴氏 (36 歳) 1 級貴金属装身具製作技能士

西沢 久美氏 (36 歳) 1 級貴金属装身具製作技能士

薬師寺 智子氏 (28 歳) 1 級貴金属装身具製作技能士

独立系宝飾メーカーとの出会い

吉村技能士は池田エンタープライズで宝飾の制作に携わって 18 年のベテラン社員である。もともと手仕事に憧れてはいたものの、いわゆる「職人」になるのは難しいだろうと考え、「日本宝飾クラフト学院」に進んだ。宝飾業界の多くは、組織内に複数のデザイナーが雇用されていて、製作や営業・販売が垂直に分化された企業である。そうした業界にあって、デザイナーがアトリエをもち、営業・販売までを手がける、独立系のメーカーがあることに、吉村技能士は驚いたという。そこに魅力を感じて、求人情報を元に池田エンタープライズを訪問したのが入社のかきかけである。



吉村技能士

技術者としての自身のレベルを知るために

技能検定の制度を知ったのは、宝飾学校時代の同期生が勤務している会社が検定制度の活用に関心だとの話を聞いたときだった。そのときは 2~3 年たったら受けてみようと思った程度だったが、10 年実務を経験してみて、技術者としての自分が今どの程度のレベルにいるのかを知りたいと思った。この時点で、実務経験 10 年以上であれば 1 級をストレート受検できるという緩和措置が 1 年後に予定されていたため、1 年待って受検することにした。「このような緩和措置はチャンスを増やすという意味でいいことだと思う。」と吉村技能士は言う。

(※現在では 7 年の実務経験で 1 級を受検できる。)

受ける動機、合格までのプロセスが重要

受検準備期間の休日や夜の練習も、今思えば楽しい思い出になっている。初めての受検で周囲に気軽に相談できる経験者もいなかったため、どこまで何をやればいいのか見当がつかなかった。自分で情報を収集し、ノウハウをつくることから始めた。これが一番勉強になったと

言ってもいい、と吉村技能士は胸を張る。「受ける動機と合格までのプロセスが重要なからだ」。

技能検定に限らず、自分自身に対してより高いハードルを課すことを習慣化することが大事だ。吉村技能士は「時間内に作り終えることが求められる実技の受検経験が、常に作業時間の短縮を意識する習慣の裏付けとなり、自信になった。」と話す。

指導者としての目と心のゆとりが育つ

実技の検定を経験すると、先を見越して動くことの必要性を身にしみて実感することになる。そして、それができるようになると、後輩の姿をみただけで「あ、ハードルを越えたな。」と感ずることができるようにもなった。また、宝飾品というものは、どういうわけか、嫌々作っていると“いやいや”な感覚が作品に出てしまう。「それでは単なるモノでしかない。」と吉村技能士は真剣な表情で言う。「自分たちはモノではなく、夢を売っているんだ。」(吉村技能士)。作り手の気持ちにゆとりがあれば、使う人にとっても心地よい作品となるに違いない。1 級技能士になったことが、そんな心のゆとりをもたらしてくれていると、吉村技能士は実感している。

技能検定合格を契機にステップアップを！

「技術職は『続けること』が一番大切だと思います。技能検定は長く続けるなかで良い刺激にもなり、自分の力を確認するチャンスにもできます。合格したとき、とても嬉しかったです。」(西沢技能士)

「昨年(2009 年)10 月に 1 級技能士になったばかりなので、まだ実感があまり湧いていません。会社に入り少しずつではあるが技術を身に付け、会社・先輩からの支援もあり、検定に合格したこと、とても嬉しいです。この結果を今後の仕事へのステップアップにつなげたいです。」(薬師寺技能士)



西沢技能士



薬師寺技能士